

國學院大學學術情報リポジトリ

七夕と昔話「天人女房」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 年中行事と昔話の関係性, 七夕行事, 昔話「天人女房」, 構成要素としての「水・着物・瓜」, 伝承と変遷 キーワード (En): 作成者: 津金, 澤乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000076

七夕と昔話「天人女房」

The research on relationships between *Tanabata* and the folk tales of the celestial maiden

津金 滯乃

キーワード：年中行事と昔話の関係性 七夕行事 昔話「天人女房」 構成要素としての「水・着物・瓜」 伝承と変遷

关键词：节日与民间故事的关系性 七夕节 民间故事《天人女房》 构成要素的“水”“衣”“瓜” 传承与变迁

要旨

昔話「天人女房」は、(A) 男が水辺で羽衣を奪い天女を妻にするが、やがて天女は天に帰る、という話である。そこで話が終わらずに、(B) 男が天女を追って天へ行くが、瓜から水が出て天の川ができて、男と天女が隔てられたのが七夕の由来、という話が続く場合もある。

歴史文献には、『古事記』『古語拾遺』に、天の女の「たなばた」が機織りをするとして記されている。平安中期の『うつほ物語』では、七夕は女性が髪を洗う日とされている。江戸後期の『諸国風俗問状答』によれば、七夕に水浴や井戸浚えをする、着物を人形に着せる、瓜を供える、などの習俗が当時の日本各地にあった。現代の七夕について『日本民俗地図』(1969年)の情報を整理すると、水浴や井戸浚えをする、着物や瓜を供える、などの習俗が日本各地に伝えられている。

七夕の信仰と習俗と、昔話「天人女房」との間には、「天女」「水」「着物(羽衣・機織り)」「瓜」という要素の共通性が指摘できる。昔話として(A)と(B)とが独立的に伝承されていることから、両者はもともと別の話で七夕の信仰と習俗を基盤として伝承されていたが、七夕という共通性によって両者が引き寄せられ結びついていったと論じた。

摘要

民間故事《天人女房》讲述了(A)一名男子从水边偷走天女的羽衣并娶她为妻，不久后天女重返天界的故事。然而至此故事并未结束，其后还有(B)男子追随天女至天界，但是被瓜中涌出的大水形成的银河阻挡，男子和天女被迫从中分开，从而便有了七夕的故事。

从历史文献中看，在《古事记》《古语拾遗》中便有天界仙女“TANABATA”织布的记述。平安时代中期的《宇津保物語》中将七夕视为女性洗发的日子。另外根据江戸后期的《诸国风俗问状答》，当时日本各地都存在，七夕当日要进行沐浴、清理水井、给人偶穿衣服、献瓜等习俗。从《日本民俗地图》(1968)中可以看出，现代的日本各地依

然传承着水浴，清理水井，供奉衣服和瓜的等习俗。

从七夕的信仰与习俗，以及民间故事《天人女房》出发，可以看见三者之间存在“天女”、“水”、“物(羽衣、织布)”、“瓜”等元素的共通性。不过作为民间故事的(A)和(B)以独立故事被传承下来，因此可以判定两则民间故事最初可能是基于七夕信仰与习俗而传承的不同故事。但是由于“七夕”这个共通性，这两则故事逐渐相互吸引并联系在一起。

はじめに

「天人女房」の名で知られている昔話の中には、七夕の由来と結びついているものがある。本稿では七夕と昔話「天人女房」の結びつきについての考察を試みる。

執筆者は以前、「天人女房」の歴史的な変遷について、日本各地の昔話の構成の比較と、歴史文献の類話の追跡とから論じている。そして、天女が羽衣を奪われる話と、瓜から水が出たのが七夕の由来という話とが、それぞれ独立して伝承されていることから、両者はもとは別の話であり、後になって結びついていった可能性を指摘している⁽¹⁾。それに対して本稿では、七夕と「天人女房」の結びつきについて、七夕の信仰と行事に着目して考察を試みる。

まず、七夕と「天人女房」の結びつきについての先行研究を整理してみる。その早い段階のものとして注目されるのが、折口信夫の「水の女」である。折口は、日本古来の「たなばたつめ」の信仰について、「天人女房」の類話にも注目して論じている〔折口 1927、1928〕。しかしこの折口の論考は、その後の「天人女房」の研究の中では、十分に注目されてこなかった。

柳田國男は、「天人女房」の中に男が瓜や豆の蔓を登って天上へ行くという事例があることに注目している。そして、急激に成長する瓜や豆の蔓を梯子として天と地とを往来したという話が早くからあり、一方で瓜類が七夕に欠かせない供物とされていたことから、羽衣説話と七夕の由来とが結びついていった可能性を指摘している〔柳田 1936〕。

その後、君島久子が民族学の立場から中国の羽衣説話の研究を行なっている。君島は、中国でも羽衣説話と七夕伝説とが結合したかたちの話がみられると指摘している。しかしそれは、織女やその母がかんざしで一線をひくと天の川ができるという話であり、日本の伝承とは異なっている。そして、日本に伝承されてい

る瓜から水が出るという話は中国には確認できないとしている〔君島 1966〕〔君島 1978〕。

近年では、中村とも子が昔話研究の立場から、七夕に瓜畑に入ってはいけないという伝承があることに注目し、日本の「天人女房」や七夕由來說話の背景には、畑作を司る存在への儀礼がある可能性を指摘している〔中村 2018〕。しかし中村は、具体的な七夕の習俗については追跡していないままであった。

次に、七夕についての先行研究をみってみる。折口信夫は、七夕には神を迎えるための禊ぎの意味があったと論じている〔折口 1930〕。柳田國男は、7月7日には盆の準備の意味もあり、大きな節日の前には斎忌の期間があったと論じている〔柳田 1931〕。

その後の研究では、たとえば小野重朗や吉成直樹が、七夕や盆の基盤に水神祭祀があったと論じており、小野は鹿児島県下の盆の焚き火行事について、吉成は高知県中央部における七夕と盆の水をめぐる伝承について、それぞれ検討している〔小野 1961〕〔吉成 1991〕。しかし、これらは特定の地域の七夕や盆について論じたものであった。

稲城信子は、七夕についての歴史文献を追跡して、七夕の歴史はたなばたつめの信仰から発しており、牽牛・織女の話の文芸化へという流れと、乞巧奠から立花へという流れの、2つがあったと指摘している。そして、この2つの流れが近世の庶民の七夕につながったと指摘している〔稲城 1976〕。稲城は、折口の論考に触れながらたなばたつめの信仰について述べているが、その折口の論についての整理は十分ではなかった。

松崎憲三は、日本各地の七夕の習俗と歴史文献に記録された七夕について、先行研究の成果を参照しながら整理しており、現代のイベント化された七夕についても紹介している〔松崎 2015〕。

柴田千賀子は、七夕の着物の伝承の分布は、東北の岩手から九州の鹿児島まで広く全国的であると指摘している。その一方で、人形飾り・人形流しの習俗は限られた範囲に伝承されていると指摘している。そして、長野県中信地方に人形に新調した着物を着せるという事例があることから、人形飾り・人形流しの習俗の背景には、広範で基盤的な七夕の着物の伝承があったと論じている〔柴田 2018〕。

以上のように、七夕と「天人女房」との結びつきについての先行研究では、折

口の論考が参考にされているものの、その整理は十分ではなかった。そして、それとは別に七夕についての研究成果が重ねられてきているが、その目的は七夕と「天人女房」の結びつきを考えるというものではなかった。

本稿では、七夕と昔話「天人女房」との結びつきについて、七夕の信仰や行事に着目して考察を試みる。まずは、折口信夫のたなばた論について要点を整理する。そして、七夕の信仰と行事について、歴史文献に記録された情報と、日本各地に伝承されている民俗情報とを追跡して、七夕と「天人女房」との関わりを探る。

一、折口信夫のたなばた論

本稿では、折口のたなばた論について、「水の女」を中心に、折口が根拠として注目している資料を確認しながら、その要点を整理してみる〔折口 1927、1928〕。なお、折口が論じている点は多岐にわたるため、七夕と昔話「天人女房」との結びつきを検討する上で重要と考えられる部分に絞って整理を試みる。

1 禊の所を定める女神「みつは」

折口が「たなばた」について論じている要点の1点目としては、古代の文献に記された「みつは」「みぬま」という語は同じもので、かつては若さや禊ぎに関連した神の名であったこと、そして、その禊ぎの所を定める女神「みつは」が徐々に忘れられていったということである。

折口はまず、『延喜式』（927年）巻八に記録された「出雲国造神賀詞」に注目している。折口はその「みぬま」についての部分を、「をち方のふる川岸、ちち方のふる川ぎしに生立（おひたてるか）若水沼間の、いやわかえに、み若えまし、すゝぎふるをとみの水のいや復元（フカミヌマ）に、み変若まし、」と読んでいる⁽²⁾。そして、従来の研究ではこの「若水沼間」について植物や淵などとされてきているが、それは「出雲国造神賀詞」が公式に記録されるまでに、幾時代もの変改を経てきたことが考慮されていないものと指摘している。折口は民俗学の立場から、古代の記録について関連したものを複数集めて比較することの重要性に着目し、それを実践している。

折口は、『出雲国風土記』の仁多郡三沢の郷の記事の「水沼」や、『日本書紀』「神

功紀」で表筒男・中筒男・底筒男の神の出現とともに記されている「水葉」という語にも注目し、「出雲国造神賀詞」の「若水沼間」と同じく、若さや禊ぎに関連した神の存在を示すものと論じている。

折口は、『日本書紀』巻第一の一書にある菊理媛神の記事にも注目している。菊理媛神の「白す事」を聞いて泉国を去った伊弉諾尊が、泉国を見てしまった穢れをすすぎはらおうと思い、粟門と速吸名門とを見るが潮が急である。そこで、橘の小門ではらいすぎ、この時にさまざまな神が生じた、という記事である⁽³⁾。折口は、この菊理媛神は禊ぎを教えたものと見るべきと指摘し、菊理媛神の「くくり」は水を潜ることであると述べている。

折口は上記の史料と、ほかにも史料をあげながら、「みつは」は以下のように変遷したと論じている。①古代には、女神「みつは」のふるまいを見て、禊ぎの所を定めていた。②それが繰り返されるうちに意味が不明となり、「みぬま」という女が禊ぎの儀式の手引きするようになった。③儀式で唱えられていた言葉（「咒詞」）も意味が不明となり、他の知識や行事・習慣から、もとの意味とは異なる解釈がなされるようになっていった。

2 「みづのをひも」と「天の羽衣」

要点の2点目としては、水や湯に関連して、神となる御体の霊結びを奉祀する巫女があったこと、そしてその霊結びには「みづのをひも」や「天の羽衣」が用いられたということである。

この点について、折口はまず、『古事記』『垂仁記』の「みづのをひも」の記事に注目している。それは、垂仁天皇が、本牟智和氣御子の「みづの小佩」を解かせるために旦波比古多々須美智宇斯王の娘4人を召したというものである⁽⁴⁾。そこには「汝が堅めたるみづの小佩は、誰か解かむ」とあり、折口はこの「みづの小佩」を「みづのをひも」と読んでいる。『日本書紀』『垂仁紀』には、垂仁天皇が、後宮を任せるために丹波国の丹波道主王の娘5人を召したと記されている。

次に折口は、大嘗祭で用いられる天皇の湯具である「天の羽衣」に注目している。この湯具の「天の羽衣」について、「水の女」の中では具体的な史料はあげられていない。折口が参考にしていただと考えられる史料を整理してみると、次の通りである。湯具の「天の羽衣」についての早い段階の記録として、『西宮記』（969年頃）の記事がある。巻十一の「大嘗会事」の項目に、「主殿供御湯、く大鏝沸御

湯、兩國進船、天皇着天羽衣、浴之如常、(後略)』と記されている⁽⁵⁾。『江家次第』(1111年頃)の巻第十の「新嘗祭」の項目には、「主殿寮供御湯、縫司供天羽衣、次御湯殿、」と記されている⁽⁶⁾。『建武年中行事』(1334から1338年頃)の6月11日の項目には、「御身に、御ゆかたびらをいふなり)舟の中にぬぎ捨て、更に又くられうの御ゆかたびらをめして、あがらせたまふ、」と記されている⁽⁷⁾。

折口はこの「天の羽衣」について、もとはもっと小さかったもので、「禊ぎ・湯沐みの時、湯や水の中で解きさける物忌みの布」であったとしている。そして、それは神の資格を得るための物忌みをする時に生命の元となる部分を結んでおくものであり、その布を結びまた解く役目をもつ巫女の存在があったと論じている。

3 神女と羽衣

要点の3点目としては、天の羽衣はもとは神女が着せるものであったが、それが、神女が着るものへと変化していったということである。

折口は、『丹後国風土記』逸文の記事に注目している。その概要は次の通りである⁽⁸⁾。丹後国丹波郡、比治里の比治山の頂の麻奈井に、天女8人が降りてきて水浴びをする。和奈佐老夫婦が1人の天女の衣裳を隠すと、その天女は天に昇れなくなり老夫婦の子どもになる。天女が飲めば病が癒える酒を醸し、老夫婦の家は豊かになるが、やがて老夫婦はお前は我が子ではないと言って天女を追い出す。その後、天女は奈具の社の豊宇加能売の命となった。

この記事は丹後国丹波郡について記したものであり、上述の「垂仁記」「垂仁紀」で召された女たちは、「旦波比古多々須美智宇斯王の女」「丹波道主王が女」とされていた。折口は、『丹後国風土記』逸文の8人の天女について、禊ぎのための神女であり、丹波道主貴の家から出る八処女の古い姿であると論じている。

折口は、神女と羽衣について、以下のように変遷したと論じている。①神女の手で天の羽衣を着せられ、脱がせられる神があった。②その神の威力をこうむり、神女自身も神とみなされるようになっていった。③神と神女とを同格に見るようになって、神がだんだん忘れられていき、神女が羽衣を着るとされるようになっていった。

4 「たなばたつめ」の信仰

要点の4点目としては、古代中国の乞巧奠の習俗や牽牛・織女の話が日本に伝来したが、その基盤には、日本古来の「たなばたつめ」の信仰があるということである。

折口は、古代の日本には、水辺に作られた「たな」に「たなばたつめ」が住んで機で布を織りながら神の訪れを待つという信仰と習俗があったとしている。折口はその根拠となる歴史文献として、『日本書紀』巻第二の一書の記事をあげている。その概要は次の通りである。瓊瓊杵尊が降臨して吾田の笠狭の御碕に着き、事勝国勝長狭に対して「其の秀起つる浪の穂の上に、八尋殿を起てて、手玉も玲瓏に紅織る少女は、是誰が子女ぞ」と問う。勝長狭が、それは大山祇神の娘で、姉が磐長姫、妹が木花開耶姫であると答え、瓊瓊杵尊は木花開耶姫と結ばれる。ここには、水の上の八尋殿で神の来臨を待ちながら機を織っている少女の姿が記されており、折口はこれが「水の女」としての職能を示しているものと指摘している。

折口は、中国から伝来した牽牛・織女の話は、女が機を織る点や、訪ねてくる者を待つ点などで、日本古来の「たなばたつめ」の信仰と類似していることから、乞巧奠の習俗とともに日本に受容されていったと論じている。そして、地方には今もまだ、日本古来の七夕の信仰と習俗が残っていると指摘している。折口は「たなばた供養」の中で、乞巧奠の伝来以前の姿を示す伝承として、七夕に水浴びをしたり女性が髪を洗ったりする習俗や、井戸浚えの習俗、衣を貸すという習俗などに注目している〔折口 1935〕。

以上のように、折口は古代の文献と民俗伝承とに注目して、日本古来の「たなばたつめ」の信仰について論じている。ただし折口は、古代以降の七夕の行事や近現代の七夕の習俗については、詳細な追跡をしていなかった。

二、歴史文献における七夕

次に、歴史文献に記録された七夕についてみてみる。本稿では先行研究の成果に学びながら、七夕と昔話「天人女房」との結びつきを考えるという目的に合わせ、あらためて情報を整理することとする。

1 古代の「棚機」と「織女」

まず、古代中国の乞巧奠がどのようなものだったのか確認してみる。中国の6世紀の『荊楚歳時記』には、7月7日は牽牛と織女が会う夜であるという話が記録されている。そして、夕に女性が針に糸を通して裁縫の上達を祈るという乞巧奠の習俗が記録されている⁽⁹⁾。

次に、日本の「たなばた」についてみる。「たなばた」という語の早い例は、『古事記』と『古語拾遺』に確認できる。『古事記』(712年)の上巻には、天若日子の弔いの場面の高比売命の歌に「天なるや 弟棚機の 項がせる 玉の御統 御統に 足玉はや み谷 二渡らす 阿治志貴高日子根の 神ぞ」とある。『古語拾遺』(807年)には、天棚機姫神が神衣を織ったと記されている⁽¹⁰⁾。つまりここには、天の女が神の衣を織ると記されており、その女が「棚機(たなばた)」とされている。ここにはまだ牽牛・織女の話は記されていない。折口が指摘しているように、これは日本古来の「たなばたつめ」の信仰を伝えるものと考えられる。

飛鳥・奈良時代の歌集である『万葉集』の中には、七夕についての和歌が約130首収録されている⁽¹¹⁾。たとえば「天漢 梶音聞 孫星 与織女 今夕相霜」(巻第十・2029)という歌があり、ここには七夕に牽牛と織女が会うという中国から伝来した話の影響があるものと考えられる。その一方で、たとえば「棚機之 五百機立而 織布之 秋去衣 孰取見」(巻第十・2034)という歌もある。ここには、棚機の機織りということが記されており、牽牛・織女の話とともに、折口のいう日本古来の「たなばたつめ」の信仰も伝えられていたと考えられる。

2 古代・中世の宮中の七夕行事

次に、宮中で具体的にどのような行事が行なわれていたのかを整理してみる。『日本書紀』には、皇極天皇元年(642)7月乙亥(22日)に、百済の使者を朝廷で饗応し、健児(力に優れた者)に命じて相撲をとらせたと記されている。その後、『続日本紀』には、天平6年(734)7月丙寅(7日)に天皇が相撲を見たこと、文人に命じて七夕の詩を作らせたことが記されている⁽¹²⁾。ここにはまだ、裁縫の上達を願う乞巧奠の行事については記されていない。

『延喜式』(927年)巻三十の織部司に「七月七日織女祭」とあり、『西宮記』(969年頃)巻四には貞元4年7月7日に「乞巧祭」が行なわれたと記されている⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。ここには中国の乞巧奠の影響があると考えられるが、両者ともにその詳しい内容

については記述がない。

その後、『江家次第』（1111年頃）の巻第八には、「七月 七日乞巧奠事」とあり、その儀式の内容が記されている⁽¹⁵⁾。そこには、楸の葉に金の針7本と銀の針7本を刺して供えることや、針に7つの穴が開いており、五色の糸をより合わせてこれに通すことが記されている。そして、上述の『荊楚歳時記』の記事が紹介されている。

その後、14世紀の宮中では七夕が七種類の遊びをする行事とされていき、それが華道の成立にもつながっていったことが、これまでに追跡され論じられてきている〔折口 1935〕〔稲城 1976〕。

以上のような乞巧奠の影響を受けて発展していったと考えられる行事に対して、この日に洗髪をするという伝承もあった。平安時代中期の成立とされる『うつほ物語』には、7月7日に貴族の女性たちが賀茂川で髪を洗っている様子が記されている⁽¹⁶⁾。その後、藤原定家の日記である『明月記』の建保元年(1213)7月7日に「洗髪始精進」と記されており、この時代においても七夕が髪を洗う日とされていたことがわかる⁽¹⁷⁾。

3 近世庶民の七夕行事

江戸時代になると、儒学や本草学、国学などの立場から庶民の文化に関心が向けられるようになり、庶民の七夕の習俗についても記録されるようになっていった。たとえば、元禄10年(1697)ごろから享保18年(1733)にかけての天野信景の『塩尻』には、信州松本では、七夕に家と家との軒に路を横切って縄を張り、木の人形に紙の衣を着せて吊るすと記されている⁽¹⁸⁾。その後、天明4年(1784)の菅江真澄の「来目路の橋」にも、信州松本で、七夕に女童が竹の枝に糸を張り、男女の人形を作ってかけ並べている様子が記されている⁽¹⁹⁾。七夕の着物については、文化12、3年(1815、6)頃の『諸国風俗問状答』にも、越後国長岡領、備後国品治郡・沼隈郡浦崎村、肥後国天草郡に事例が確認できる⁽²⁰⁾。

この『諸国風俗問状答』には、そのほかにも、七夕の水や瓜に関する習俗が記されている。出羽国秋田領と備後国品治郡には7度水を浴びる事例が、越後国長岡領と備後国福山領には油がついたものを洗う事例が、備後国福山領と紀伊国和歌山には井戸浚えをする事例が、確認できる。また、七夕に瓜や西瓜を供える習俗は、大和国高取領、備後国福山領・深津郡本庄村・品治郡・沼隈郡浦崎村、紀

伊国和歌山、淡路国、阿波国、阿波国高河原村、肥後国天草郡に確認できる。伊勢国白子領では、唐黍などの葉で舟を造り、そこに瓜や茄子などをのせ、短冊をつけた小竹とともに海に流すとされている。

江戸の町の七夕行事についても確認してみると、次の通りである。文政13年(1830)の『嬉遊笑覧』には、「江戸にて近ごろ文政二三年の頃より七夕の短冊つくる、篠に種々の物を色紙にて張りてつるす、其頃はなべてせしにはあらざりし、只浜町辺の町屋などにて見しが今は大かた江戸の内せぬ所もなきやうなり」と記されている⁽²¹⁾。江戸とその近郊の年中行事を記した天保9年(1838)刊の『東都歳事記』にも、7月6日の条に、家ごとの屋上に短冊をつけた竹を立てていること、市中には作り物を拵えて竹とともに高く出す習俗があることが記録されており、それが「近年のならばし也」とされている⁽²²⁾。

ただし、『諸国風俗問答』をみると、笹竹に短冊などを飾る習俗が、陸奥国白川領から肥後国天草郡という広い範囲に伝えられていたことがわかる。そして、伊勢国白子領、備後国福山領・品治郡、阿波国、阿波国高河原村では、その笹竹を川や海へ流すとしていることが注目される。

三、日本各地の七夕

七夕について歴史文献から得られる情報は限られており、七夕について研究する上では、それらと併せて民俗伝承に含まれる歴史的な情報の蓄積も活用する必要がある。民俗学にとって、特定の地域や個別の事例について詳細な調査・研究を行なっていくことは重要である。そして、それと同時に日本各地から事例を収集して比較検討することも重要である。柳田國男はすでに、民俗伝承の地域ごとの差異についてそれを歴史的な変遷の段階の差として読み取る研究視点を提示して、日本各地の広い範囲から多くの事例を集めて検討する必要性を強調している〔柳田 1929〕〔柳田 1930a〕。本稿では、その柳田の提示した比較研究の視点に学び、歴史文献に記された情報をもふまえた上で、現代の七夕の伝承がどのような地域的な広がりをもって伝えられてきているのか、その傾向を把握して七夕についての考察を試みる。このような試みから、今後さらに歴史と民俗の情報を収集して研究を深化させていくための見通しが得られると考えている。

このような試みに適する資料として、本稿では、日本各地の民俗伝承の情報を

収集している文化庁『日本民俗地図Ⅰ（年中行事1）』（1969年、国土地理協会）を取り上げ、その「七夕」の情報を整理する。『日本民俗地図』に記載されている情報は個別的で断片的なものではあるが、全国的な視野から収集されているものであることから貴重な情報として活用することとした⁽²³⁾。

『日本民俗地図』には七夕について、895の地域の調査結果が記載されていた。北海道から鹿児島まで、全国的に七夕の習俗が確認できる。

1 竹を立てる事例

現在では七夕の習俗として、竹を立てて、そこに願い事を書いた短冊を吊るすということがよく知られている。『日本民俗地図』でも竹を立てたり飾ったりするという事例が206の地域でみられ、北海道から鹿児島まで全国的であった。そして、その竹を川や海に流すという事例も、山形・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・富山・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・大阪・和歌山・鳥取・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知・佐賀・大分・鹿児島にみられた。近世後期の『諸国風俗問答答』の中にも竹を川や海に流している例があった。竹に短冊を飾るという習俗も、もとは禊ぎ祓えのためのものであった可能性がある。

2 盆に関連する事例

この日に盆の準備をするという事例も広くみられた。まず、行事の名称についてみてみると、最も多かったのは「七夕」「七夕様」「七夕祭り」など七夕系のもので、北海道から鹿児島までの広い範囲に確認できた。続いて多かったのが「七日盆」「なぬか盆」「盆ノ入り」など盆に関連するものであった。そのような事例が青森から鹿児島までの114の地域でみられた。ただし、関東北部と九州北部には事例がみられなかった。

次に内容についてみてみると、この日に墓参りや墓掃除をするという事例が220の地域にみられ、ほぼ全国的であった。分布は東北に濃厚で、四国・九州北部にやや薄い。そのほかにも、迎え火を焚く、仏具の掃除をするなど、この日を盆のはじまりとする事例が多数あった。

3 水に関連する事例

水に関連する行事を行なうという事例が、東北から九州までの広い範囲にみら

れた。とくに多かったのが井戸浚えをするというもので70事例、次に多かったのが水浴をするというもので58事例であった。この日に髪を洗うというものが20事例あり、そのほかにも油物を洗ったり洗濯をしったりするという事例もあった。この日を水神を祭る日としている事例もあった。たとえば、山形県米沢市では「6日に水神様に供えた餅を食べる」、兵庫県豊岡市では「この日に井戸替えをし、おみきと米を供えて水神を祭る」とされている。

4 着物に関連する事例

着物に関連する事例は、20の地域にみられた。そのうち着物を供えるというものが9事例あり、山形・埼玉・静岡・福岡・大分・鹿児島にみられた。埼玉県越生町では「新しく縫った着物を七夕様に供えると針の腕があがる」とされている。また、着物を飾ったり吊るしたりするというものが7事例あり、福島・愛知・奈良・香川・福岡・熊本にみられた。福島県安達町では「七夕様の織った衣装になぞらえ、廊下・座敷などに衣装を掛けた」とされている。そのほか、着物を着るというものが4事例あり、岩手・群馬・岡山・広島にみられた。岩手県大野村では「一番装いを七夕さまに貸し申す」と称して晴れ着を着る」とされている。

着物を供える習俗には、折口が論じているような、機を織りながら神の訪れを待つ「たなばたつめ」の信仰が伝えられている可能性がある。そしてそれが、着物を飾ったり着たりする習俗へと展開してきているものと考えられる。

5 瓜に関連する事例

瓜類に関する伝承は、58の地域にみられた。瓜や胡瓜、西瓜などの瓜類を供えるという事例が、埼玉・千葉・富山・長野・静岡・愛知・大阪・兵庫・和歌山・鳥取・島根・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知・福岡・長崎・大分に確認できた。そのほか、茨城と鳥取には西瓜を食べるという事例があり、岡山と広島には胡瓜で馬を作るという事例があった。新潟・奈良・高知には、瓜を食べることを忌む事例があった。

なお、七夕に瓜を供える習俗については、6世紀の中国で記された『荆楚歳時記』にも記述がある。しかし、この中国の習俗と日本の七夕の瓜の習俗との関係性を、具体的な記録をもとに追跡することは困難である。本稿で注目するのは、日本の七夕における瓜の伝承である。

日本における瓜については、水神との関係が注目されてきている。たとえば、『日本書紀』『仁徳紀』には、河内人茨田連杉子が堤を塞ぐために水神に捧げられそうになるが、2つの匏を沈めることを条件に出して難を逃れるという記事がある。瓜と水神の関係について研究が重ねられてきており、折口信夫は河童が胡瓜を好むという伝承に注目している〔折口 1929〕。柳田國男は、祇園の神が好むとって夏祭の日に胡瓜を川に流す習俗や、祭の日以降に胡瓜を食べることを忌む習俗などに注目している〔柳田 1930b〕。

以上の『日本民俗地図』の「七夕」の情報について、都道府県ごとの事例数を整理してみたものが表1である。

四、七夕と昔話「天人女房」の結びつき

以上の七夕についての歴史文献と民俗伝承の情報の整理をもとに、七夕と昔話「天人女房」の結びつきについて、その考察を試みる。

昔話「天人女房」について事例を集めて整理してみると、この話は次の(A)(B)(C)(D)の組み合わせで構成されていることがわかる⁽²⁴⁾。

- (A) 男が水辺で、水浴をしていた天女の羽衣を見つけて奪い、天女を妻にする。やがて天女は羽衣を見つけて天に帰る。
- (B) 男が天女を追って、瓜の蔓を伝い天上へ行く。
- (C) 天女の両親が男に難題を課す。
- (D) 男が食うなと言われた瓜を食うと、瓜から水が出て、男と天女が隔てられる。2人は年に1度7月7日に会うことになり、これが七夕の由来である。

そして、その組み合わせとしては、[A][A-B][A-B-C][A-D][A-B-D][A-B-C-D][D][B-D][C-D][B-C-D]という10種類があった。(A)のみというかたちと、(D)のみというかたちとが、広く別々のものとして伝承されていることから、(A)と(D)とはもとは別の話であったと考えられる。

まず、(A)の天女と羽衣の話を整理してみると、多くの事例に「天女」「水」「羽衣」という要素が共通していることが指摘できる。次に、(D)の瓜と七夕の話を整理してみると、多くの事例に「瓜」「水」「七夕」という要素が共通していることが指摘できる。(A)と(D)とをつなぐ(B)や(C)にも、「瓜」という要素が出て

表1 『日本民俗地図』における七夕の事例

	事例数	竹を立てる	墓	井戸浚え	水浴	先髪	着物	瓜
北海道	7	3	0	0	0	0	0	0
青森県	22	0	11	3	9	0	0	0
岩手県	27	2	15	1	8	0	1	0
宮城県	22	3	7	0	4	0	0	0
秋田県	25	2	19	1	4	0	0	0
山形県	25	1	11	0	4	0	1	0
福島県	26	5	10	0	1	1	1	0
茨城県	19	5	5	2	0	1	0	1
栃木県	22	7	3	0	1	0	0	0
群馬県	21	11	1	0	2	0	1	0
埼玉県	29	18	3	0	1	2	2	2
千葉県	20	2	3	1	0	0	0	1
東京都	12	3	1	1	1	0	0	0
神奈川県	18	4	2	0	0	0	0	0
新潟県	25	0	6	0	2	1	0	1
富山県	18	5	2	0	1	0	0	1
石川県	13	0	3	0	0	1	0	0
福井県	8	0	5	1	0	0	0	0
山梨県	15	6	2	0	0	0	0	0
長野県	25	2	10	0	3	1	0	1
岐阜県	13	0	2	0	0	0	0	0
静岡県	20	10	0	1	0	0	2	4
愛知県	20	10	1	0	0	1	1	8
三重県	12	1	2	0	0	0	0	0
滋賀県	12	0	6	1	0	0	0	0
京都府	11	1	8	2	0	0	0	0
大阪府	23	2	11	11	0	2	0	1
兵庫県	19	1	7	1	0	0	0	1
奈良県	21	2	7	7	0	2	1	1
和歌山県	19	4	2	6	0	0	0	3
鳥取県	20	3	3	1	1	1	0	3
島根県	22	5	5	0	1	0	0	1
岡山県	29	8	6	6	4	0	1	6
広島県	22	9	4	10	5	0	1	6
山口県	15	1	6	3	2	0	0	1
徳島県	30	9	0	1	0	3	0	3
香川県	23	10	3	4	2	1	1	4
愛媛県	25	10	0	2	0	0	0	3
高知県	23	9	0	2	0	0	0	2
福岡県	16	5	0	0	1	3	3	2
佐賀県	18	10	0	0	0	0	0	0
長崎県	13	3	0	1	0	0	0	1
熊本県	16	5	2	0	0	0	1	0
大分県	18	4	5	1	1	0	2	1
宮崎県	12	2	6	0	0	0	0	0
鹿児島県	24	3	15	0	0	0	1	0
合計	895	206	220	70	58	20	20	58

くる事例が多い。(B)については、男が瓜の蔓を伝って天上へ行く事例があり、(C)については、男が天女の両親から、瓜の種をまけ、瓜を収穫しろ、などの難題を課される事例がある。

次に、七夕の信仰と行事について、本稿で追跡したことをあらためて整理してみる。古代の「たなばた」の信仰については、『古事記』『古語拾遺』に「天の女」が「機織り」をするということが記されていた。七夕の行事については、歴史文献の追跡から、平安時代中期には女性が髪を洗う習俗があったこと、江戸時代には日本各地で「水」「着物」「瓜」に関する習俗が伝えられていたことを確認した。そして、『日本民俗地図』の情報の整理から、現代でも日本各地の広い範囲に、七夕の「水」「着物」「瓜」に関する習俗が伝承されていることを確認した。

以上を整理すると、七夕と昔話「天人女房」の(A)との間に、「天女」「水」「着物(機織り・羽衣)」という要素の共通性が見出せる。七夕と昔話の(D)とには、「水」「瓜」「七夕」の要素が共通している。昔話の(A)と(D)とには、「水」の要素が共通している。つまり、昔話「天人女房」の(A)と(D)とが結びついていった背景には、七夕の「水」「着物」「瓜」をめぐる伝承があったということが指摘できる。

(A)については、世界各地に類話の存在が指摘されているが、日本においては、折口が指摘する「たなばたつめ」の信仰のような、水と着物をめぐる伝承を基盤として受容され、広まっていった可能性がある。(D)については、その話のうち、年に1度7月7日に男女が会うことになるという部分には、古代中国の牽牛・織女の話の影響があると考えられる。それに対して、瓜から水が出るという部分は、日本の昔話の特徴である。つまり、(A)と(D)とは、それぞれが七夕の信仰と習俗を基盤として別々に伝承されてきたものであり、共通する七夕の要素によって両者が引き寄せられ、(A)と(D)とが結びついたかたち話が生まれてきたものと考えられる。

五、本稿で論じた要点

本稿で論じた要点をまとめると次の通りである。

(1)折口信夫のたなばた論について、次の4つを要点としてまとめた。

①古代の日本には禊の所を定める女神「みつは」の存在があった。

- ②神となる体に、水中で霊結びのための布を結びまた解く巫女の存在があった。
- ③その霊結びのための布が天の羽衣である。羽衣はもとは神女が着せるものであったが、後に神女が着るものとされていった。
- ④中国から乞巧奠の習俗や牽牛・織女の話が伝来したが、その基盤には、水辺の「たな」で機織りをしながら神の訪れを待つという日本古来の「たなばたつめ」の信仰があった。

(2)七夕について歴史文献の情報を追跡して、次の3点を指摘した。

- ①古代の日本には、天の女が機を織るという「棚機」の信仰があり、それに古代中国から伝来した牽牛・織女の話が重ねあわされていった。
- ②『江家次第』によれば12世紀の宮中では、7月7日に針を供えるという、古代中国の乞巧奠に影響を受けたと考えられる行事が行なわれていた。その一方で、平安時代中期成立とされている『うつほ物語』によれば、七夕は女性が髪を洗う日ともされていた。そこには、日本古来の水をめぐる信仰が伝えられていたものと考えられる。
- ③文化12、3年(1815、6)頃の『諸国風俗問状答』によれば、江戸時代後期には日本各地に、水浴をする、井戸浚えをする、着物を人形に着せる、瓜を供えるなどの習俗が伝えられていた。

(3)七夕について民俗の情報を整理して、次の3点を指摘した。

- ①七夕に水浴をする、髪を洗う、井戸浚えをするなど、水に関連する習俗が、東北から九州まで広く伝えられている。現代では七夕に竹を飾るという習俗がよく知られているが、その竹を川に流すという事例もある。七夕の竹には、水による禊ぎ祓えという基盤的な意味があったと考えられる。
- ②七夕に着物を供えたり飾ったりする習俗が、岩手から鹿児島まで広く伝えられている。この着物を供える習俗は、折口が指摘した、機織りをしながら神の訪れを待つ「たなばたつめ」の信仰の伝承からつながってきているものと考えられる。そしてそれが、着物を飾る習俗へ展開してきたと考えられる。
- ③七夕に瓜を供える習俗が、関東から九州まで伝えられている。瓜については、柳田や折口が指摘しているように、水神との関係が深いと考えられる。

(4)七夕と昔話「天人女房」との結びつきについて、次の3点を指摘した。

- ①七夕の信仰には「天の女」「機織り」という要素が、七夕の習俗には「水」「着物」「瓜」という要素がある。

②昔話「天人女房」の(A)には、「天女」「水」「羽衣」という要素が、(D)には「瓜」「水」「七夕」という要素がある。

③七夕と昔話の(A)との間には「天女」「水」「着物(機織り・羽衣)」という要素が、七夕と昔話の(D)との間には「水」「瓜」「七夕」という要素が、共通している。(A)と(D)とは、それぞれ七夕の信仰と習俗を基盤として伝承されてきた話であり、両者が七夕という共通性によって引き寄せられることによって、(A)と(D)とが結びついた話が生まれてきたものと考えられる。

以上、本稿では、七夕と昔話「天人女房」との関わりについて、その伝承の歴史の読み解きを試みた。このような視点は、そのほかの民俗行事と昔話との関係の分析にも応用することができると考えている。

本稿は、柳田國男が提示した、昔話と民俗信仰とが互いに関連しあいながら歴史的にどのように展開してきたのかに注目する研究視点に学ぶものである。それは、古代から現在までをひとつづきの歴史としてとらえ、時代に伴う変化もそれまでの歴史の積み重ねの上にあるという考えに基づくものであった。しかし、その柳田の視点が十分に継承されないままに、その後の昔話の研究の中心は、話型研究や昔話の伝承者の研究などへと移っていった。柳田の研究視点を再検討し、改良して実践していく必要があると考えている。

現代でも、七夕の習俗は、笹に短冊を吊るすというかたちへと姿を変えながら続いてきており、7月7日に天の川を渡って織姫と彦星が会うという話が根強く伝承されている。また、「天人女房」は異なる世界に属する男女の恋愛物語ともいえ、それは現代においても、小説や漫画、アニメなどの中で繰り返し創作されて人気を博している。そのような現代の文化は、七夕の習俗と昔話「天人女房」を伝承してきた歴史の上に成り立っている。現代の文化のあり方を考えるために、さまざまな角度から歴史を研究しておくことが必要であり、本稿の成果もその一助となると考えている。

註

- (1) それについては、現在別稿を準備している。
- (2) 引用にあたっては『折口信夫全集』第2巻(1965年、中央公論社)を参照し、ルビは全集の表記の通りとした。傍線は省略した。
- (3) 本稿では『日本書紀』について、『新編日本古典文学全集』の2から4(1994から1998年、小学館)を参照した。
- (4) 本稿では『古事記』について、『新編日本古典文学全集1』(1997年、小学館)を参照した。

- (5) 『新訂増補 故実叢書』第19回(1955年、明治図書出版)を参照した。割注部分は〈 〉で示した。
- (6) 『増訂 故実叢書』(1929年、吉川弘文館)。
- (7) 『新訂増補 故実叢書』第5回(1951年、明治図書出版)。
- (8) 『新編日本古典文学全集5』(1997年、小学館)。
- (9) 『東洋文庫324 荊楚歳時記』(1978年、平凡社)。
- (10) 『古語拾遺』(1931年、社会教育会)。
- (11) 『新編日本古典文学全集8』(1995年、小学館)。
- (12) 『新日本古典文学大系13』(1990年、岩波書店)。
- (13) 『新訂増補 国史大系 第二部10』(1953年、吉川弘文館)。
- (14) 『新訂増補 故実叢書』第18回(1952年、明治図書出版)。
- (15) 前掲(6)。
- (16) 『新編日本古典文学全集14』(1999年、小学館)。
- (17) 『明月記 第二』(1911年、国書刊行会)。
- (18) 『日本随筆大成〈第三期〉15』(1977年、吉川弘文館)。
- (19) 『菅江真澄全集』第1巻(1971年、未来社)。
- (20) 『日本庶民生活史料集成』第9巻(1969年、三一書房)。
- (21) 『日本随筆大成 別巻 嬉遊笑覧3』(1979年、吉川弘文館)。
- (22) 『東洋文庫177 東都歳事記2』(1970年、平凡社)。
- (23) 『日本民俗地図』は、1962から1964年度に渡る「民俗資料緊急調査」を基礎データとしたものであり、その収集された情報の一部を整理して刊行されたものである。それは、収集された情報の詳細な報告があまりに大部な分量にのぼっており、編集の上からも経費の上からもそのすべてを出版することが難しいという当時の事情からであった。その後、その調査の成果の一部は、『日本の民俗』(全47巻、1971から1975年、第一法規)にも反映された。これらは日本ではじめての大規模な民俗資料の一斉調査の成果であり、調査当時の日本の民俗の伝承情報を広く反映しているものとして、活用すべき重要な情報であると考える。
- (24) 事例の整理にあたっては、稲田浩二ほか『日本昔話通観』(1977から1998年、同朋舎出版)を参照し、必要な場合は原典も確認した。

参考文献

- 折口信夫 1927、1928 「水の女」『民族』第2巻第6号、第3巻第2号(『折口信夫全集』第2巻所収)
- 折口信夫 1929 「河童の話」『中央公論』第44巻第9号(『折口信夫全集』第3巻所収)
- 折口信夫 1930から1932 「年中行事」『民俗学』第2巻第8号、第10号、第4巻第6号から第9号(『折口信夫全集』第15巻所収)
- 折口信夫 1935 「たなばた供養」『俳句研究』第2巻第7号(『折口信夫全集』第15巻所収)
- 稲城信子 1976 「七夕の変遷」『元興寺仏教民俗資料研究所年報 1975』元興寺仏教民俗資料研究所
- 小野重朗 1961 「鹿児島盆の火」『日本民俗学会報』第18号
- 君島久子 1966 「洪水伝説と羽衣」『芸芸研究』第4号
- 君島久子 1978 「東洋の天女たち」『民話と伝承・世界の民族』朝日新聞社
- 柴田千賀子 2018 「七夕の人形」『民俗伝承学の視点と方法』吉川弘文館
- 中村とも子 2018 「昔話「天人女房」に関するいくつかの考察」『昔話伝説研究』第37号
- 松崎憲三 2015 「七夕まつりの予備的考察」『民俗学研究所紀要』第39集
- 柳田國男 1929 「鐸入考」『三宅博士古稀祝賀記念論文集』岡書院(『定本柳田國男集』第15巻)

所収)

- 柳田國男 1930a 『蝸牛考』 刀江書院 (『定本柳田國男集』第18卷所収)
柳田國男 1930b 「瓜子織姫」『旅と伝説』 (『定本柳田國男集』第8卷所収)
柳田國男 1931 「民間暦小考」『北安曇郡郷土誌年中行事編』 (『定本柳田國男集』第13卷所収)
柳田國男 1936 「犬飼七夕譚」『俳句研究』3卷8号 (『定本柳田國男集』第13卷所収)
吉成直樹 1991 「七夕、盆行事にみる水神祭祀としての性格」『日本民俗学』第187号